

写真家・永瀬沙世--海外との仕事で再認識したアーティストステイトメントの重要性
【INTERVIEW】

2016年6月20日



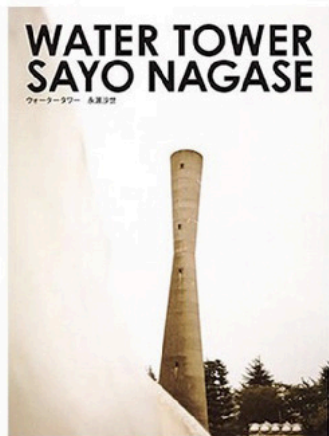
気鋭の写真家・永瀬沙世。海外のクライアントやギャラリーと仕事をするが増えた近年、永瀬は作品を言葉にするのは難しい、しかし文化の成り立ちが違う人たちに伝えるためのアーティストステイトメントの重要性を再認識しているという。後編では、永瀬自身の言葉と共に、彼女の作品集に込められたメッセージを読み解きたい。前編はこちらから

■ 『WATER TOWER』 (2011)

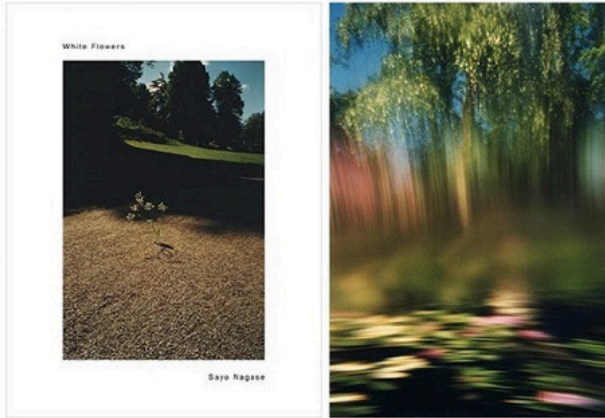
『WATER TOWER』は古代がテーマになった作品だ。この世界にある、どこでもないどこか、そんな光景が続く。日本国内でも確かなものは何か、本質的な価値を知りたいという見えない欲求が高まった2011年にこの作品集が刊行されているのも興味深い。女性的な光やシルエットが横たわるようなカットもあれば、水を抱いてそびえ立つ水の塔もある。相反する存在が存在する世界を永瀬の視点で切り取った作品に思える。

「これは（東日本大）震災の1週間前に出来上がった写真集です。古代は大きな木の下に長老がいて、そこが不安になった時の心の拠り所になっていたんだと思います。大きな塔や木に宿る神様や精霊を拝むような気持ち。みんなが指標にする何か分からない時代になってきたな、という思いで撮ったのがこの『WATER TOWER』です」（永瀬）

■ 『WATER TOWER』 (2011)



■ 『White Flowers』 (2012)



『White Flowers』と題された作品は、実は“免疫”がテーマ。どこにでもありそうな日常のシーンの中に、度々登場する白い花々。この可憐な花こそが、永瀬を苦しめる存在だったとは…。そんな世の中の不条理を切り取った作品といえるかもしれない。

「もともとこの白い花が気になって撮りはじめたのが、この花を目の前にすると具合が悪くなってしまっ…結局、この花の花粉症だったんです。この花が好きなのに、自分の白血球はこの花粉を異物だとみなして攻撃するからくしゃみも出れば、鼻水も出る。そこで、免疫って何だろうって…。だから、一番最後のページに暗号のようなメッセージを残しました。“Your hay fever has nothing to do with your thoughts.”って。花粉症は思い過ごしだよって思うことで、この花を好きなことを肯定したかったんです」（永瀬）

■ 『Pink Lemonade』 (2013)



■ 『Pink Lemonade』 (2013)

色の三原色（シアン、マゼンダ、イエロー）のマゼンダが“ピンク”、イエローが“レモネード”というイメージで作られた写真集。真逆のものが惹かれ合い、近づいたり離れたりしながら生きていく感じが伝わってくる。

「わたしは暗室でプリント作業する時、マゼンダとイエローという逆の光を少しずつ混ぜていき微妙に色をつくってるため、色を考える時、頭の中がそのパズルを解いている感覚になっているのです。モデルのヘアスタイルも黒髪とピンクの髪だったり、真逆の色を隣合わせる面白さがある。それは、感覚的なようでありながら、ロジカルでもある。モデルはアメリカと日本のハーフ。あえて日本の要素である畳の上で撮影したり、アメリカで買ったスニーカーを履かせて東京郊外の街で撮影したり。イエローとマゼンダのように、異なるものを同時に溶け合わせていく作業から生まれた作品」（永瀬）

永瀬の写真に映るのは“みんなが見ているのに、気づいていないものたち”なのだろうか…。

ぜひ一度、彼女の作品の前に立って、その気配を感じてもらいたい。



【永瀬沙世プロフィール】

1978年兵庫県生まれ。2016年、2年振りに写真集「SPRITE（スプライト）」を発表、個展も同時に開催される。今まで7冊の写真集を製作し、「PINK LEMONADE」「Asphalt & Chalk」は、パリを拠点とするストックホルムのLIBRARYMAN社から出版された。

《Shigematsu Yuka》

FASHION HEADLINE

Copyright(c) FASHION HEADLINE, 記事・画像の無断転載を禁じます